

東京都豊島区公園データベースの構築とその分析

～利用者・利用シーンと公園施設の関係性～

鈴木亮輔

本研究では、東京都豊島区内における公園の利用シーン、周辺環境を踏まえつつ公園が持つ魅力、役割を最大限生かすためには公園内外にどんな機能や管理、利用方法について、都市公園の全数調査を行い、分析をした。

近年の新型コロナウイルスによる感染拡大の懸念から一時的に利用が制限されたこと。また、近年公園における禁止事項増加されていること。以上2点を踏まえて、公共施設として利用方法が制限されていることに疑問を抱いた。研究対象は東京都豊島区とする。選定理由は、豊島区はまちづくりの一環で都市公園を活用から、整備された公園と整備されていない公園で、役割や機能面で公園の利用・活用方法に違いがみられると推定したため。

豊島区内の都市公園（89公園）の全数調査を行った。公園の利用状況、年代や利用行動について調査、データベースを作成し、記録した。

結果として、整備された公園、整備されていない公園では、管理方法、利用者数、利用目的に違いがあった。公園まちづくりの核となった「南池袋公園」「中池袋公園」「池袋西口公園」「としまみどりの防災公園」は各公園で、公募設置管理制度（Park-PFI）を活用、民間企業が参入し、カフェが併設されることで利用者が多く、幅広い年代で利用が見られた。複数人での利用が多くみられ、利用目的としては、食事や読書、勉強、会議と多岐にわたっていた。柵や塀は一切設置されていない。

一方で、整備されていない小規模公園では、公園を利用する方法・目的が読書、休憩と限定的となり利用者が少ない傾向にあった。また、レイアウトや植木に特別な変化がなく単調な作りが多かった。1人での利用が多くみられた。

一つの都市公園で国土交通省が期待する役割を担うことは困難であると分かった。利用目的等で相対する関係であると分かった。そのため、地域内でネットワークを広げて、期待される役割を補い合う必要があると分かった。

加えて、公園の利便性の高さは利用増加に繋がるとは限らないことが分かった。「池袋駅前公園」は池袋駅東出口から徒歩2分ほどにある公園よりも池袋駅から1.3km離れた住宅街に設置された「千早フラワー公園」の方が利用者は多かった。「池袋駅前公園」は、利用者の多数が喫煙を行い、利用者が

少なかった。一方で「千早フラワー公園」は、着座設備や遊具が豊富に設置されていた。そのため、幅広い年代に利用され、子ども同士での利用且つ親同士のコミュニティの場となっていた。「千早フラワー公園」のような条件が公共施設として公園が居心地よく、安全、安心で過ごせる空間が完成すると考えた。

東京都豊島区の場合、結論として利用者の満足度を上げるには4つの公園を核とし、公園同士でネットワークを持ち役割を補い合うこと。そして、豊富な着座設備や遊具は利用の促進につながり、連鎖的にコミュニティが形成され誰もが安心して過ごせる空間が形成されることが分かった。